

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
6月号

毎月23日発行
通巻382号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



西千代ヶ丘公園（鶏の峯あたり）から三輪山を望む 野 保夫さん撮影

平成4年9月6日 大倭神宮月次祭での法話より（上）

大倭神宮について（その三）

法主 矢追 日聖

三輪の出雲

日本の歴史の中では、大倭神宮は抹殺されております。

例えば、あんた達も須佐之緒命と八岐の大蛇の伝説を聞いてるやろ。須佐之緒命が八岐の大蛇を退治して、奇稲田日女命を助けて結婚したというような話やけど、それは出雲、今の島根県の伝説ということになってるわな。

けれども本当は、あれは大和の話なんやで。大和の三輪に出雲というのがあんだ（※奈良県桜井市出雲）。

ところが後の歴史を作った人が山陰の方にしてしまったね。同じ出雲やから、山陰の方が本家になって、三輪の出雲は伝説の中から消えてしまってます。

この須佐之緒命という人は、高天の原から来たという伝説になっております。ということは、海の向こうから渡って来た外来の神さんだということですわねん。

海岸で見た時、空と海とずーっとへばりついた水平線のところに、船が向こうから来ると、ちょうど天から下りて来たように見えますわね。古代の人は、天から下りて来た人が日本に渡って来たように考えたわけや。天もアマと言っし、海もアマと言っし、どっちもアマという言葉を使うんです。だから高天の原から来た神さんというのは、外来の人なんです。

二・三月号の「大倭神宮について」その一・その二と併せてお読み下さい。

これに対して奇稲田日女命は、日本の本土にいた神さんです。大和の三輪におられた方なんです。この二人は、言うてみたら国際結婚したんですわね、まあ大昔の時代のことやからどんなものか分からんけれども。

八岐の大蛇は、頭が八つもあつて人を食うという伝説なんですけれども、私はあれを人間としての話にして考えた場合ですわね。

ちょうど大和の三輪という所は、南の方は吉野やし、東側は宇陀から柘植とか、あの辺りには部族がたくさんおりました。そんな頃は略奪結婚がかなりあります。自分の部族同士は結婚しない、他所のお姫さんを連れてきて結婚するのが習わしなんです。

それで三輪に八人のお姫さんがおつたらしいんやけれども、その内七人までが、あつちこつちに連れていかれてしまつて一番最後に残つていたお姫さんが奇稲田日女命さんなんです。お父さんは足名稚（あしななご）、お母さんは手名稚（てななご）という名前、三輪の一つの豪族ですわね。

最後に残つたお姫さんがまた連れていかれるというので、お父さんお母さんと泣いていた時に、たまたま遠い国から日本へ入つて来た、非常に武力もある須佐之緒命という人がおつて、助けてもらつたという話やわな。

その後、奇稲田日女命さんは三輪の出雲に居つたんやけれども、まだまだ八岐の大蛇、ということはいろんな部族の執念があつて、そこに居られない。

だから須佐之緒命さんと一緒に、大倭の登美の方へ出てきて、現在のこの大倭神宮の場所に住まいをされておつたんです。そして最後は、ここで亡くなつてます。だから、現在は山陰の方へ行つてしまつてますが、出雲の神さんの本家本元はこ

こ、大倭神宮なんです。

奇稲田日女命さんの腹におつて大倭神宮で生まれたのが、饒速日命さんです。別の名前を大國主命とも言つて、大倭神宮の北からずつと南の熊野の端までの近畿地域を治めておつた大王さんです。その辺りが大倭の国ですわね。

大倭神宮の辺りは、所の名を長曾根（山の長い裾根）と言われてました。だから長曾根の王さんが、長曾根日子という名前になつてるんです。長曾根日子も饒速日命の一族なんです。

抹殺された歴史

その長曾根日子と九州から出てきた神武天皇が戦争したことになつていて、その時に大倭神宮から金の鶏——戦前は金鶏勲章というのがありまして——が出たという伝説があるわけです。

ところがねえ、神武天皇の流れが日本の中心になつて現在までできている中で、それ以前の元々の大倭にずつと歴代おつた大王というもの、また長曾根の土地そのものが、日本の歴史から全部抹殺されているんです。

『古事記』『日本書紀』というのには、飛鳥時代から奈良時代の始めにかけて元明、元正天皇の頃にできています。それ以前の歴史は言い伝えばかりやつたけど、ここで文字に記録したんやね。第一には、天照大神に始まつて神武天皇からという天皇中心の歴史をきれいになくしてはならなかつたわけ。そうでないと九州から出てきた人がヤマト（大倭）を占領して、その後日本が出来たようになつてくるし、歴史上、具合が悪いんですよ。それ以前のヤマトにおつた大王のことは抹殺されて、それが現代の、つい戦前まで続いてたんです。

そんなことで、大倭神宮はいつも隠されておる

場所なんです。しかし、奇稲田日女命や須佐之緒命、大國主命（饒速日命）の靈魂は、みんな根っこが大倭神宮にあるんです。

その人達が、日本の表に出てないために不平不満で鬱勃として、霊界におるんです。だから、私がそういうお役目で、日本の表に出さないといかん時代ですわね。それで私はこんなことを喋つておるんです。

天照大神が、今日、日本民族の祖神になつてますが、本当は奇稲田日女命や饒速日命が祖神なんですよ。天照大神は他所から来た神さんなんです。

現在あんた達、全国の神社や自分の村の鎮守の杜へ行つて、ご祭神を見てきたら分かつと思うんです。殆どが、須佐之緒命、奇稲田日女命が饒速日命です。天照大神を主体として祭つている神社は全国どこへ行つても少ないでしょう。伊勢神宮は天皇家のお宮さんだから、天照大神を祭つてますが。

日本の民族が、神武天皇が来られる以前に信仰しておつた元々の神さんを祭つているんです。だから大倭神宮は、その意味で全国の大親元なんです。「とおやまと」というのは、「おおおやまと」ということです。

「おやまと」がなまつて「やまと」、そのもう一つ根本の日本民族の祖神のおる場所が、大親元、大倭なんです。

余計なことやけど、病気やとか霊的障害やとか、いろんなことで相談にくる人がよくあります。だから私が色々と処理をします。それは私個人の心霊治療なんです。神さんは関係ないんです。まあ霊障害があつたとして、それを処理した時に相手が言うことを聞いてくれるというのは、私は何もえらいことはないけれども、私の後ろに大倭のこわい神さんがおるからなんですわね。

風ぐるま

筑後の三輪

博多にて 矢部 顕

梅雨の合間、予報では曇り時々雨といつていたから散策にはちょうどよいかと思ひ、休日のおんぼつた鳥栖市に住む二男の次郎を誘ひ、彼のおんぼつた三輪で甘木三輪を訪ねた。ところがなんと太陽はジリジリ照りつけ真夏日になってしまつて、冷房のないビートルは、おまけにブレーキまわりの調整不足か、車体の下のほうから煙がでてくる始末。なんとか甘木市にたどりついた。

福岡県の南、筑後川流域に大和と同じ三輪という地名があり、前から気になつていて、一度訪ねてみたいと思つていた。

甘木鉄道の終点甘木駅前には、「日本発祥の地 卑弥呼の里 あまぎ」と刻まれた自然石の大きな碑が建つていた。駅前の観光案内所で訊ねたら大己貴神社も平塚川添遺跡（Ⅱ4頁写真）も近い。

大己貴神社はうっそうと生ひ茂る森に囲まれて、まわりの社務所集会所などはういぶん古びてみずばらしいが、拝殿はなかなか立派である。左手奥、孟宗竹林の奥に山を拝む遥拝所らしき注連縄と朽ちかけた台座がある。この神社は『日本書紀』に「大三輪社」と記されているとのこと。甘木市の西北に隣接する三輪町の由来はこの神社の別名、大三輪神社、大神神社にちなんでいる。この神社の背後には御神体おみかみの大神山もある。

壮大さでは比べるべくもないが、大和の三輪山を御神体とする日本で最も古いことで有名な神社「大神神社」と同じではないか。そういえば、このあたりの風景は大和桜井のあたりとどこか似て

「だま」とだま

群馬県安中市 桜井 誓 子

日元さん、亡祖父・中村文太郎（※新皇教宮、去る四月二日帰幽）他界に際しましては、お心遣いいただきましてありがとうございます。

祖父が帰幽して四週間目になりましたが、本当に帰つていつてしまったのだと寂しくしております。最期の何週間は食事を受け付けず、まるで自ら食事を断つて旅支度をしているかのような祖父でした。十五年程前に亡き祖母が倒れて以来、ずっと一人で将玄坊様（※法主様が鎮められた平将門公の霊界でのお名前）と家を守つてきた祖父。いつか法主様が一人暮らしの祖父を思われて、「かわいそうやなあ。誰か見てあげたらええんや」と涙ぐまれたということを知っております。

正直で真直ぐでいつも人様の為に奔走し、また少し不器用だった祖父でしたが、その、一人で懸命に守つてきた姿は、私達の心にもしっかりと焼き付いています。今では感謝の気持ちで一杯です。

祖父が亡くなって二日目の晩のことでした。いろいろ。

だれもいない神社をあとにして、平塚川添遺跡に向かう。甘木インターの近く、高速道路の下をくぐり大きな工場をいくつ横にみえ進むと、突然、新しく出来たばかりの感じのする駐車場にぶつかると、それらしい風景がないと思いつつ真新しい建物に入ると、ガイダンスルームに遺跡の説明パネルがあり、となりに体験学習館がある。その建物の東側に遺跡公園がひろがつており、

が、母が不思議なことを申しました。白装束を着て額に鉢巻きをした祖父が、大勢の者を従えて、これから修行に行くというようなことを申し渡しているような光景で、その意気軒昂な様子はまるで出陣でもするかのようだった、と。そういう様子を感じたということでした。確かに不思議な話でしたが、何故か私には、まるで奇妙なことを言っているとは思いませんでした。それからは祖父を思う時、生前の老いた祖父には感じられなかった力強い何かを感じるような気がします。

振り返れば、たつた一人でもあの土地を守つてきてくれたということは、祖父にしか出来ない仕事だったように思います。そして後に残る私達はそうした姿を見ることで、何かを想い起こす立場にあるのかもしれない。そのようなそれぞれの立場を思う時、人には各々、命が与えられており、命を果たすために生きていくのだということを知らされる思いがします。人間が存在するということとは実は単純なことではないのかもしれない。また繋がりとというのは不思議で尊いものですね。紫陽花邑の皆さんからの電報をお聞きした時は、とても嬉しく涙があふれました。皆さんにもどうぞよろしくお伝え下さい。（4月23日）

弥生時代の竪穴式住居、祭殿、高床式倉庫、首長館などが復元されている。祭殿はまだ新しく木の香や縄の藁の匂いがする。幾重もの環濠に水をたたえたのどかな風景がひろがる。一部しか再現されていないが六重の環濠は日本で最初の発見である。おしむらくは再現の規模において、吉野ケ里よりはるかにこぢんまりとしている。平塚工業団地造成によつて消滅する前に、調査し記録にとどめようと、平成3年に鉋がはいったというからずい

ぶん新しい。平成6年に国史跡に指定された。かつて訪れたことのある老岐の原ノ辻遺跡、佐賀の吉野ケ里遺跡と同時代、『魏志倭人伝』に描かれていた邪馬台国時代のひとつのクニの中心遺跡。この時期の日本最大級の環濠集落だ。きつちりと発掘がなされていけば吉野ケ里を越える規模のものという。あの巨大な工場群の下に弥生が眠っている。

中年の学芸員は、私が奈良から来た（仕事で博多にはいるが）というと、ずいぶんと丁寧に説明をしてくれた。研究者と勘違いしたらしい(笑)。

体験学習館では「勾玉造り」や「火起こし」をやっていた。舞錐式の発火具（火起こしの道具）はいくつかの大きさで作られ、弥生時代の発火具を実験していることがうかがわれたが、私からみるとまだ完成度が低い。弾みの錘も少し重すぎて反転しにくい。ヒキリの材料にながよいか質問された。「ここに使用しているように、ヒキリ板（下の受け板）は杉がよい。ヒキリギネ（回転するほうの木）はこのアジサイも悪くはないが、わ



たしがいろいろ試みた経験からいうとサツキやウツギがよい」と答え、「下の杉板はもう少し薄くてもよい。厚いと落下に時間がかかり温度が下がる」などの意見を述べたら、えらく感心された。この遺跡で舞

錐式の発火具が発掘されたのかと訊いてみたが、発掘されていないとの答えだった。

息子の次郎が小学生のころ、私は登呂の遺跡から発掘された発火具の復元に熱中していた時期があった。いろいろな大ききものをつくり、ヒキリの材料もいろいろ試してみた。完成度が高いものは5分とかからず発火した。次郎が製作したものを夏休みの宿題工作として提出したら、奈良県森林組合長賞を受賞したことを思い出した。

「ここは邪馬台国か？」と学芸員に尋ねたら、笑っていた。

九州にはあちこちに邪馬台国比定地がある。これも有力な候補地だ。

安本美典氏（産能大学教授）は、邪馬台国Ⅱやマトという単一の地名さがしでなく、甘木地方にある地名と大和地方にある地名との数多くの類似の指摘をした。三輪、田原、高田、笠置など21個の地名が同一しているだけでなく、位置、方角も類似して存在するという。新しい土地に移住した人間は、その土地の山や川や地域に故郷に因んだ名をつける習性がある。

これらの地名の類似から推理されるのは、甘木地方にまず邪馬台国が成立し、それが東遷して大和に來たとされる。これは『古事記』などの神武東征神話とも一致する。大和政権が九州のほうから來た勢力によって確立されたことは確かだろうからそれとも一致する。30年前の安本氏の「邪馬台国甘木説」の論文は、この遺跡の発掘によって、より実証的になったといえよう。

邪馬台国は九州に起こり、東遷し、大和にもまた邪馬台国があったとする説だと、九州説も畿内大和説も顔が立つことになるのだろうか。

古墳が点在し、大和の風景とよく似た三輪甘木地方を後にしながら、帰路、想像をめぐらせた。

熊野の玉置山へ

福井市 齋藤 正宏

五月十九日の朝、二台の中型サロンバスに分乗した第二七〇回文化行事の一行三十八人は、奈良国際ゴルフ場を後に熊野の玉置山へと向かった。文化行事である以上、玉置神社の由来や霊的な意味合い、熊野との位置的な関連等々の因縁があるのだろうが、『樹齡千年の神代杉やシャクナゲを楽しみ新緑の一日を過ごす』という誘い文句につられ、「十津川村や熊野の山奥ならば新緑の写真が撮れるかな」などと、ほとんど物見遊山モードで便乗している私であった。

ところがある。バスが五条市を通過するあたりから雲行きは次第に怪しくなり、国道一六八号線が十津川沿いに溪谷をさかのぼり始める頃にはすっかり雨模様となってしまったのだ。「文化行事に龍神さんはつきものだしなあ……」と自分を納得させた次第である。

奈良から和歌山県の新宮へと抜けるこの道すじは、両脇を見上げるばかりの断崖絶壁に囲まれている。今なお続けられている道路改修工事でも、橋一本かけるのに十階建てのビル程度の橋脚を造らねばならぬほどの深さ・険しさである。その谷底をくねくねとたどる道すじは、古くは倭を指す神武の一行が辿ったそれであったのだろうし、またある時は都落ちを急ぐ武者たちのそれであったろう。私たち一行を乗せたバスは、その道すじに眠る様々な人たちの想いやドラマ、時の流れをすつかりと包み込み何事もなかったように横たわる巨大な山塊の、そのまた奥へと更に分け入ってゆく。いよいよ熊野の奥舞台である。



標高一〇七六メートルの玉置山山頂近くの駐車場でバスを降りた私たちは、杉の巨木が林立する鬱蒼とした参道を進んだ。雨は降り続いていたが、薄日が杉木立の間に立ちこめる霧を明るく照らし、紅白の横断幕でも張っていたような感じであった。玉置神社の社殿近くでは、樹齢三千年ともいわれる神代杉や夫婦杉（＝写真）の出迎えを受け、仰ぎながら周囲を回る者あり、記念撮影をする者ありで、皆それぞれ楽しんでやうである。この後、古寂びた拝殿にて教長さんを代表に参拝させていただき、雨宿りを兼ねた昼食となった。歓談したり、奥の玉石社に詣つたりした後、帰途についたが、もう少し、できれば翌朝まで熊野に残っていたいような感じであった。最後に、後付けでおさらしいした事柄をまとめておくと、神武東遷の折、八咫鳥に先導された一行が兵を休め、神宝を鎮めて戦勝祈願を行ったのが玉置山であり、紀元前三七年、第十代崇神天皇により創建されたのが玉置神社であるという。七世紀後半、この地で修行を積んだ役小角（役の行者）が大峰山を開いてより後は、大峰修験道の拠点となり、現在に至っている。主祭神は國常立尊（くにとこたちのみこと／宇宙・生命の根元神）である。

平成13年11月11日 大倭会文化講演会 於：大倭大本宮拝殿

アニミズムの世界 —沖繩・龍神… (3)

—故山尾三省さんを偲びつつ—

講師 野本三吉氏

母の理・沖繩の役割

それから（広島で原爆を経験してから）以後、比嘉ハツさんは、すっかり神がかりになってしまつて、これから世の中の大きな立替の時期が来て、いよいよ母の理が表に現われねばならず、そのため地上母神としてハツさんを使うということを押さんに言われたらしいんです。

また良弘さんの話のところを『いのちの群れ』から読みます。

しかも、その母の理が隠されているのは、小さいながら、この沖繩の島で、その役割は大事だといふんですなあ。

それからが大変でしたよ。戦争で犠牲になった方々の遺骨の供養をはじめたわけですからね。これ、政府では何もしませんでしたよ。

本土の楯となった沖繩では、兵士ばかりではなく、農民も女も子どもも、無差別に殺されましたからね。それは、なんとも残酷な、そしてむごい死に方でしたよ。洞窟の中で蒸し殺しにされたり、火災

放射器で焼き殺されたりでね。それに又、自決をした人達も多かったですね。それが、みんなほつたらかしたんですよ。それをね、家内は掘り出しては供養し、祝詞をあげて埋めていったんですよ。一人ではとても手におえませぬのでね、私も家族も、子どもも、それに、いつのまにか家

内の霊能力をたつたて集まってくるようになった人達とで、それこそ泥まみれになって掘つたものですよ。

おもに洞窟の中に多くありましてね。不思議なこと、その洞窟の周辺には必ず、気狂いがたくさん出るんですよ。家内は、その精神異常者がしゃべる言葉や行いを見てましてね、どこにその洞窟があり、遺骨があるかを当てるんですよ。

みつげだして供養しますとね、気の狂った人たちが、急に目が覚めたように元に戻りましてね。それはもう不思議なことですよ。

戦争で亡くなった人達の霊が、どうしても死にきれず、近くに住んでいる者にとりついていてるわけでしょうが、全く恐ろしいことですよ。そういう気狂いが、しばらく前までは、実に多かったですがね。最近では、だいぶ分減ってきましたよ。

家内はね、最近では、沖繩での仕事は、大体終わったので、今度は日本の番がくると申しましてね。日本から必ず若い人が来るはずだからと、ぜひ来たら宮古島へ来るようにと書いていましてがね…。

まあ、ぼくは、選ばれたかどうかは別にしても、とにかくハツさんに会ってみたいと思つて、宮古島に行つたわけです。これが二十七歳の時です。

宮古島には八汐丸という小さな船で行きました。丸一晩船に乗って、小さな港に着きましたら、何と一人、日本の女性が先に着いていました。今、大阪にいる、ペンネームを水田ふうさんと言いまして、本名は生和さちこさんと言うのですけど、さっちゃんと呼んでいました。やはり神田孝一さんの勉強会で、沖繩に行つたらいいと言われて一人で来ていたわけです。今は、向井孝さんと一緒に「非暴力直接行動」というのを実際にやって

いらつしやいます。
電話で連絡をしておきましたので、宮古島の方達と生和さんが、「三吉さあん」と手を振って迎えてくれました。そして一行が宿泊している、宮古島の中心にある、砂川真長さんの家へ連れて行ってくれました。

砂川さんは高校の先生でたいへんな物知りで、宮古島のことをよく知っておられて、案内をしてくれるんですが、その頃は四十代でした。——実は、ついこの間九月の半ばに、三十数年ぶりで宮古島に行ってきたんです。砂川真長さんにお会いしました。会った瞬間に「おお、三吉君、君は変わらんなあ」と言うんですね。ぼくも「砂川さんも全然変わりませぬね」と言ったら、「いや、もう歯も抜けて、腰も抜けて、もうダメだわ」と言うんです。家に十字架があつたので何かと聞くと、「いや、最近キリスト教になつてね。何でもいいんだわ」と、ケラケラ笑っておられました。「さびしくてしょうがないから、これやつているんだよ。近くに教会があるから」と言っておられました(笑)。

部屋に着いてハツさんに初めてお会いするんですが、真っ黒な髪を束ねて後ろに流した、眉の濃い、びっくりするくらい耳たぶの大きい人でした。ただ、会った瞬間に、「懐かしい」と思いました。その方は巳年でした。ぼくも巳年で二まわりちがう。ぼくの母も巳年なんです。

そして、「あなたおみやげを持ってきたよね」と言うんですよ。でも何も持ってきてないし、どうしようかと思つたんですけど。たまたま写真集を誰かに渡そうと思つて十冊か二十冊持つて来ていました。東京で駅に立つて地震が起きるといふ話をしていた頃、北海道の牧場にいた時に撮つた写真に『僕は太陽の子どもだった』というタイト

ルを付けて写真集を作つたんですね。「これくらいしかありませんが」と写真集を出した。ハツさんはじつとそれを見て、「このタイトルは誰が付けたんですか」「ぼくが付けたよ」「そうれごらんない」「はあ?」「あなたは、太陽の子どもだったと、自分のことを言っているでしょう」

「ああ、でも、そう付けたから付けただけですよ」「あなたは今までは、太陽ばかり探してきました。天をばかり探してきました。だけど大事なのは大地ですよ。お母さんですよ。命を生み出すお母さんが大事で、お父さんとお母さんが一緒にいなければならない新しい命は生まれないのです。お母さんを探しにあなたは来たね。母を訪ねて三千里」と言つて腹を抱えて笑うわけですよ。一瞬、恐かつた。その笑いというのはものすごくいんです。

「北海道はどんな形をしていますか」「こういう形です」と、写真を見せて図をかけた。「宮古島はどんな形をしていますか」「こういう形です」と、やはり図をかく。同じ形だ。「魚のエイの形をしているでしょう。あなたは、父の北海道から母の理を探すために、母を訪ねて三千里、ここまで来たのです。母の理を探すためには言葉では分かりませんよ。一緒にこれから体験して下さい」と言うんですね。そしてすぐそばにいた喜屋武初枝さんという方が、突然立ち上がつて「ああ、嬉しやな、嬉しやな」と踊りだすんですよ。——この間、この方がもう亡くなつていたということを聞きまして、とつてもさびしかつたんですけど。「今まで太陽神・父神の理は悟つたけれど、地上母の理を悟ることができず、母を訪ねてここまで来たのですよ。お分かりですか」と言うわけですね。古事記で言う、根の国、底の国というのは、この母の理をおし込めてしまったことを現している、今の世界ではどこを指すかという沖繩だと

言うのです。いろいろ理屈はあるでしょうけれど、その通りにぼくは受け止めていました。

そして、「これから、宮古島の岩戸開きに行くところです。言葉ではとても伝えきれませんが、一緒に行きましょう。体験しなければ、これは分からないことです」と言われました。

洞窟へ

これから言うことは、体験でしか分からないことですから、なかなか言葉では伝わらないことが多いかと思いますが……。

沖繩で亡くなつた方達が、皆、地下壕、鍾乳洞の中に逃げるわけですね。入口は本当に小さな、人が一人入れるかどうかという所です。中はものすごく広くて、しかも、こんなに素敵な場所があつたのかというくらい、すばらしい所なんです。何千年、ひよつとすると、何億年かけて、上から石灰水がぼたぼたと落ちてくる。それが少しずつ、それこそ10年に何センチというくらいの時間をかけて下にたまって、一つの形をつくるわけです。洞窟の一番奥の方に行きますと、何とそれが人間の形をしているんです。彫刻家が創つたつてこんな見事な立体像はできないと思ひますが、本当に、もう、仏像のような、すばらしいのが自然の中にできています。比嘉さんたちは沖繩で三千を超える鍾乳洞をまわつて歩いていきました。有名な玉泉洞、今沖繩に行く観光地になつていますが、あれを一番先に見つけたのが比嘉さんたちなんです。ぼくも、まだ観光地になる前の玉泉洞に入りました。ろうそくをつけながら皆でまわつたんですが、この時はもう、鳥肌が立って、身震いがしました。そしてこの中に、つまり地上の、根の深いところに、おし込められていた母の理がありますよと、こういうふう言われる。(続く)

こもれる魂魄の地をたずねて(九)

彌彦神社の歴史

平成13年9月29日

杉本 順一

新潟県西蒲原郡に弥彦神社という所がある。今度のことかなければ、ここを訪ねることはなかっただろう。

昨年四月二十日、鈴月かあさんの前夜祭の日だった。八王子市の萩島千明さんから「弥彦神社」のことなどを聞かされたが、前夜祭の時だっただけにすっかり忘れていた。

六月になって新潟市に住んでいるTさんから電話があった。私には面識のない男性である。

彼は十八、九歳の頃から二十年もずっと精神的に苦しんでいるものがあるという。先祖さんのことや住んでいる所、生まれた所など色々話を聞いていくうち土地に縁のある何か彼につながっているのを感じたので、あらためて家系のことなどFAXしてくるように伝えた。戸籍の書類まで送られてあったのには驚いた。

彼の父親の出生地に目がいく。何かしら気になつて仕方ない。見ているうち「ワレエミシナリ」「ユルサレテ ミチアラシメヨ」と強い感応がある。Tさんにはこの霊人がつながっているらしい。平成十二年五月に萩島さん達と訪ねた大甕神社と天香香背男命を思い出した。この方も「エミシシ」だったからだ。Tさんの場合は「エゾタチナリ」と複数の霊界人である。

ここで、弥彦神社とT氏の父の出生地が共に「新潟県西蒲原郡」であることに気付いた。神社といい、地縁といい何かあると感じた。

謎ときをするのが私の目的ではない。エミシシの霊達を慰めるのが先である。さて、どこで慰霊すればいいのか？

まず弥彦神社を調べることにした。「日本の神々」白水社／谷川健一編によると、当社の古い縁起である「弥彦縁起断簡」には、祭神は和銅二年(七〇九)に来臨、養老三(七一九)に宮を造営……と記されてあるらしい。

又、三三九頁には「弥彦明神上陸の伝説地野積集落があり……」。……さらに、山塊の海に面した中腹に間瀬銅山があり、その麓の間瀬(石室村)には明神上陸の洗足岩と、明神が豪族安麻背を退治したという伝説がある」とのことである。

では日本史から見たこの地方は、どうだろう。六四五年 六月、中大兄皇子が中臣鎌足らとはかり蘇我入鹿を誅する。大化の改新始まる。

六四七年 この年、越国に淳足柵がつくられ、柵戸を置いて蝦夷に備える。

六四八年 この年、越国に磐舟柵がもうけられ、越後、信濃の民が移住して柵戸となる。

六五八年 四月、阿倍比羅夫が一八〇艘の船団を率いて、蝦夷、肅慎を討つ。

六六三年 日本・百濟軍が白村江で唐・新羅の連合軍とたたかつて敗れ、百濟は滅びる。

七〇九年 三月、陸奥・越後二国の蝦夷、良民を害す。遠江、駿河などの民を徴発して、越後・陸奥の蝦夷を討つ。七月、諸国の兵器が出羽柵に運ばれる。

七一〇年 都が平城京に遷される。右記の年表からもこの頃の越国が想像出来る。

インターネットで見た「彌彦神社にまつわる伝説」には「神代の昔、彌彦大神が越後開拓のため野積に上陸した当時のことです。弥彦山裏側にあ

たる日本海に面した海浜一帯に、安麻背と名乗る凶賊が、たくさんの部下を従え、近隣を荒らし回り、大勢の婦女を略奪して、善良な住民から恐れられていました」とある。

当時、越国(新潟県)は畿内王権の直接支配の外に置かれていた時代であることがよく分かる。エミシ一族の長として安麻背は大和の軍勢と戦つたに違いなかった。

法主様は「ボンヨ(私のこと) コノイチゾクタチノコト」「コノモノタチノ イレイヲセヨ ソレガサキ」と私のすべきことを教えて下さった。弥彦神社は大和側(勝者)の神社である。

では、エミシの人達はどこに？
「モトワ ワレラノモリナリ」

「ヤヒコノモリト トナエタテマツララシシ」と安麻背さんの言もあり、弥彦神社に行くことになったのは平成十三年九月二十九日であった。

二十九日朝五時、空はまだ星空であった。北陸自動車道を走つて午後一時十分、弥彦神社前に着いた。運転してくれた高橋良美さんと見田暎子さん、岸田哲・文子夫妻、東京方面から来た見田竜介・萩島千明夫妻そして愚妻志津女と私の八人であった。

神社の造られる前は、エミシの人達の杜であったのだろうと想像しながら奥へと進んで行った。あと数段で本殿に入ると思っていたら急に足が止まつてしまう。「あれあれ」と思いながら、さでどうしようかと考えたら「ツチノアルトコニユケ」とのこと。本殿奥左の登山道に進み、道はずれて水垣にお供えものをおいて全員でエミシの方達に懇ろに慰霊の挨拶をした。

「ウツシヨノミチ アリガタク」「ワレラミナココニ シズマル」との感応をうけた。

何かしらホツとした気になった。

(7)

あじさい日誌

5月12日 祝会。東京の山本あきさんが初参加されました。
 5月14日 甲野善紀さんから聞いたこのことで東京の金子さんという女性が来邑。

5月15日 大倭神宮月次祭。
 5月16日 大倭病院の看護のイベントで健康チェックを玄関前で実施。参加者113人、心待ちにしていたという声もあり地域に浸透してきたようです。



5月18日 福井市の齋藤正宏さん

大倭宿 夏まつり
 不用品バザーも行いますので、いつもお贈りいただくよりも、ぜひお越しください。
 7月27日(土) 午後4時30分～
 あすか広場にて
 お問い合わせ 安宿苑事務局
 TEL 0742-48-3221まで

ん来邑、青山法義さんと一緒に法主様の法話テープをCD化する作業を始めました。

5月22日 このところ有志の皆さんが邑内を花一杯にと活動中。この日は東方碑周辺にアジサイを植えてくれました。



5月23日 大倭大本宮月次祭。
 5月25日 午後、史跡文化センターで、結純子のひとり芝居「地面の底がぬけたんです」の公演(奈良市主催)。大倭からも大勢が参加、交流の家の隣に住む山崎安裕美・奈紀佐姉妹は花束贈呈役をしてくれました。
 大倭病院の歓送迎会。大和田町の松本院院長宅で焼肉パーティが行われました。

5月26日 溝口省吾・邦子夫妻と杉本順一・志津女が、慰霊のため八尾市の物部守屋さんの墳墓に行きました。仏教伝来の頃、仏教派の聖徳太子に仕えていた矢追家の先祖、道麻呂が、神道派として対立相手であった物部守屋を弓で倒したというこ

す。この夜、生駒山をはさんで東側では満月、西側ではものすごい雷が降りました。(P)

5月26・27日 大倭グループ(大倭殖産(株)・大倭印刷(株)・(有)倭商・倭会) 64名が研修旅行で山陰皆生温泉方面へ。2日間共お天気に恵まれ、松江の足立美術館や大根島を観光、大漁市場やお菓子の壽城で買物を楽しみました。

5月28日 大倭病院役員会。余談ですが、監査役の大東いそさんは最近、短歌がご趣味とのこと。一首ご披露頂きました。「幾たびも春夏秋冬尋め来しも初めて出会う花の大倭」
 6月2日 大倭会館で青山日元さんの米寿をお祝いする会が行われ80人近くがぎっしりと出席。玄孫までご一族約50人の賑わいでした。日元さんのお元氣なのが一番の宝でしょう。



6月6日 大倭神宮月次祭。今年もアオバズクの番いが樹上に来ているのを皆で見ました。

夜、大倭会館で邑倭の会。
 6月7日 昭和50年に昇ちゃんを大倭に連れてきた東京都ろうあ者更生寮の指導員だった鈴木宏美さんが、この日亡くなったそうです。54歳。その後は原爆の絵画で有名な丸木美術館で仕事をしておられたとのこと。

6月9日 午前中は田植え、午後は祝会で重なるメンバーが多く忙しい日程でしたが、田植えも順調に、後の宴会も盛り上がりました。
 大倭安宿苑より
 6月2日 長曾根察あじさい広場にて毎年恒例の卓球大会。各施設の住苑者、職員の選手が熱戦をくりひろげました。
 (菅原園)
 5月31日、6月1日 今年度最初のグループが淡路島方面へ宿泊旅行をしました。
 (須加宮寮)

5月26日 鴻池陸上競技場で行われた奈良県障害者スポーツ大会・陸上競技大会に6名の住苑者が参加しました。
 (長曾根寮)
 5月26日 黒住教から約20名の方が清掃奉仕に來られました。
 (八重垣園)
 5月25日 何人かが「地面の底」を観劇、「良かった。泣きました」と言っておられました。

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
 7月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四〇四回祝会
 7月14日(日) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮)
 7月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大本宮)
 7月23日(火) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

野本三吉さんからのお葉書
 『おおやまと』とどきました。ありがとうございます。横浜と沖繩の往復は、肉体的には疲れますが、沖繩に着くと楽になります。少しずつ南国の風土に慣れてきているのではないかと思います。海をボンヤリ眺めていると、長い長い生命の歴史がかんじられてきます。お元氣で。

編集後記

▼私はバスポートの要る時代に沖繩へ行ったが、今年は沖繩の本土復帰30周年という。また6月23日は、沖繩で日本軍がアメリカ軍に降伏した日とのこと。野本さんの講演の連載がこのタイミングに合わせたようになったのは、無計画の計画。(春)